

【ポスター発表】

地域社会と大学と協働した社会福祉教育実践活動の意義と課題

ーボランティアフェスティバルを事例にしてー

○南九州大学 林 典生 (会員番号 5404)

キーワード3つ：社会福祉教育、協働、ボランティアフェスティバル

1. 研究目的

演者が所属する大学において、2012年から都城市社会福祉協議会および都城市内にある福祉団体等からの提案を受け、大学のキャンパスを活用したみやこんじょボランティアフェスティバル（以下、ボラフェスと略す）を3回開催した。演者はこのイベントの実行委員として学生と一緒に関わる中で、地域社会と大学と協働した社会福祉教育実践活動を行う中で、意義と課題が明らかになるとともに、今後、このような実践を実施する上での方向性を明らかにしていきたい。

2. 研究の視点および方法

本研究はボラフェスについて詳細な記録をまとめるとともに、およびボラフェス実行委員や事務局スタッフ、当日参加した学生ボランティアおよび来場者を対象にしたインタビューを行い、本研究は、3年間、ボラフェスの実行委員として参加した学生Aの視点を中心に記録などを整理した。

3. 倫理的配慮

この研究を実施するに当たり、南九州大学倫理委員会に研究計画及び成果物について審査を実施して、了承が得られ、かつ実践現場でも了承されたものである。この研究は個人情報保護の視点から、実行委員および事務局スタッフなどの関係者および学生ボランティアおよび来場者に説明を行い、活動全体の記録整理やインタビューを実施した。

4. 研究結果

本研究の結果、最初はとりあえずやらなければとの思いで活動したが、回数を重ねる中で、大学と地域がより一つになる大きなイベントの重要性を年々考えるようになってきたとの三段階の意識や行動変化があげられる。第一段階は「初年度は実行委員として実行委員会会議に出ても、具体的なイメージがわきづらく、話をただ聞いて帰る状況であった。第1回目のボラフェスが開催されたときに、参加規模の大きさに驚き、今でも覚えている。」体験を行う中で、「ボラフェスを大学や学生に知った上で学内にある様々な団体等に協力を呼びかける」や「ボラフェスを通じて、大学や学生の良さを知ってもらおう」との地域と大学の相互理解の重要性に学生A自ら気づくことが契機になっている。次の段階として、「2回目は学生がボランティアを果たしたうえで、実行委員としてボラフェス全体に協力していく必要性を感じたと証言しており、受動的な関わりから主体的な関わりを目指すように

なった。その理由として、「担当コーナーは、ボランティアも配属されていたこともあり、内容も把握できていた。しかしそれ以外のコーナーとは、あまり面識もなく終わった印象を受け、「学生の行った活動」「かかわりを持っていない他の団体がどういう活動をするか」を考えながら、イベント全体を見ていくことで、次の活動に繋げていく視点の必要性に気づいた」とあげている。最後の段階として学生 A はより実行委員会に様々な意見を述べるなど積極的に関わり、1・2 回目に事務局が調整していた大学生のボランティアの募集など関連業務を任された。そして、学生 A は「今までかかわりのなかった、実行委員として活動をした各団体関係者・大学生のボランティアとして初めてしゃべる人などの様々な人との交流、大きなイベントを運営することの大変さ・人の協力の大切を実感することができるなど、本当にたくさんの良い経験ができたと思う。この経験は、普通に大学生生活を送ることでは、なかなか得ることのできない経験が得られた」と総括している。

また、学生 A が今後の課題として、「今後、学生が大学で大きなイベントが開催されていることに誇りをもって、ボランティアとして参加してほしい。また、実行委員の活動に責任はあるが、貴重な経験になるので、主体的に一生懸命に取り組めるように、実行委員会や事務局スタッフ関係者の皆様にもそれに応じてほしい。」とあげており、そのためには参加する学生自身が参加してよかったと感じる経験をさせて、次年度以後にも参加したい気持ちにさせる参加継続できる流れの仕掛けづくりの必要性をあげている。また、運営委員や事務局スタッフが大学生との意見交換を行うなどを行って、どこまで大学の学生委員にまかせるべきかの部分をどこまで見極めていきながら、学生を育てていくといった、運営委員会や事務局スタッフが学生を支えやすくする体制の在り方を課題として挙げている。そして、学生 A があげている課題は地域との連携も含めて、大学全体の支援体制の在り方に関して「より大学がボラフェスで協働するには、学生だけでなく、教職員などの関係者が、イベントを歓迎し、全員で参加や協力していくことである。」とあげており、今後ボラフェスを継続的に実施し、大学生がこの意義を享受するには、積極的な大学生の参加を促すだけではなく、大学側が地域と協力し合って、様々な地域住民が参加しやすくできる基盤づくりの必要性を述べている。

5. 考察

本研究は、2012年に演者が発表した、学生と地域住民主体のガーデニングワークショップ実施が一つの契機となって、地域社会と大学とが協働した福祉教育実践活動の一事例である。今回は大学内外の支援ネットワーク構築するための基盤作りを行うことで大学生生活支援に寄与すると考えられる。今後、実践を積み上げる中で、多くの支援を必要とする大学生も含めて、大学に関わっている方々にとってより良い人生を歩めることが支援できるシステム作りには貢献していきたい。

なお、本研究の一部は南九州学園研究奨励費などの大学や学生および関係者の様々な支援によって行われたものである。この場を借りて、深く感謝する次第である。